

*敬称略

審査委員長

赤池 学

(プロジェクトデザイナー、科学技術ジャーナリスト)

第2回となるウッドデザイン賞は作品のレベルが格段に向上しており、本賞の目指すところが多くの事業者や地域にご理解いただけてきた証と嬉しく感じている。

多様な連携によって木材利用の新たな価値提案につなげている実践や、少子高齢化、防災対策といった社会的課題を木を使って解決しようという試み、木の機能や効能を引き出す技術・工法も数多く見られた。木と人という同じ命が寄り添う意味をメッセージしてくれる先駆的なモデルを、消費者の皆さんにもさまざまな専門家の方々にも、是非、感じて欲しい。



建築・空間・建材・部材分野 分野長

隈研吾

(建築家、東京大学 教授)

昨年から始まったウッドデザイン賞だが、今年はさらに応募作品の質の向上が見られた。改めて新しい木の使い方、使うための技術、素材などの開発が進んでいることが読み取れて嬉しく思う。2020年の東京オリンピック、パラリンピック開催などを契機に、日本の木づかいは海外からの注目を今後も集めていくだろう。ウッドデザイン賞はその先進例が集まる賞として期待している。



The Courier

木製品分野 分野長

益田 文和

(プロダクトデザイナー)

日本という国で調達できる材料は限られている。木を使うことは必然であったにも関わらず、最近ではそうではなくなったこと自体が問題である。世界的に見ても恵まれた森林資源を活かす、何でもまず木でつくってみることが基本なのだ。かつてのように木を使ってさまざまなものをつくりだす、ウッドデザイン賞がそんなきっかけになることを期待している。



建築・空間・建材・部材分野

腰原 幹雄

(東京大学 生産技術研究所 教授)

日本には千年以上の木造建築の歴史があるが、私たちはその時と同じライフスタイルで暮らしているわけではない。今の生活スタイル、森林資源を考えた社会システムの中で木を使うことを考えていく必要がある。そのためには構造や耐火の技術、材料の耐久性も考えなくてはならない。ただ木を使うだけではなく、楽しく使っていく。多様な木の使い方の提案があったことを嬉しく感じている。



建築・空間・建材・部材分野

鈴木 恵千代

(空間デザイナー)

ウッドデザイン賞で出合った素材を、空間づくりという自分の仕事の中でも活かしているが、とても評判が良い。今まで注目されなかった素材や、身近な杉材でも大胆な構造が見られ、大いに参考になった。ウッドデザインという考え方は、日本の産業や自然環境に大きな影響を与えているもの。プロから一般の方まで、木を持つポテンシャルを感じてもらえるのではないかと思う。



コミュニケーション分野 分野長

日比野 克彦

(アーティスト、東京芸術大学 教授)

アルゼンチンの首都ブエノスアイレスのサン・マルティン広場に、木のベンチがある...と思いきや、巨大なゴムの木の幹から巨大な枝が地面スレスレにいい具合に延びていた姿でした。高さ20m、幹周り10m、枝が覆う直径は30mくらいはある。私は初めて訪れたアルゼンチンの人柄が、この木に出ているような気がした。木は人に近いのかもしれない...。そんなウッドデザインに出会えることをこれからも期待しています。

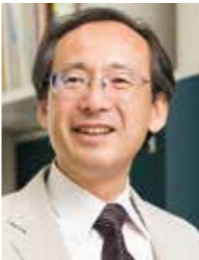


技術・研究分野 分野長

伊香賀 俊治

(慶應義塾大学 大学院 教授)

木という素材が持つリラックス効果、健康効果などのエビデンスを示しているものも多く、木の良さを知らしめながら、使い方の可能性を広げていく提案が増えたと感じている。新たな木の可能性を感じ、受賞作品を是非じっくり見ていただきたい。木の良さを日常生活の中で実感できるような研究、技術をこれからも期待している。



建築・空間・建材・部材分野

手塚 由比

(建築家)

木材はいわゆる人工材料とは違う、魅力的な材料だと思っている。ウッドデザイン賞への応募作品を見ると、伝統的な使い方に縛られず、木でこんなこともできる、こんなところにも使えるという可能性が見えて楽しい。木は育ってきた土、光、水の恵みを感じられる素材。木材になってもそれが感じられるような、人に優しい社会がつけられていくことを望んでいる。



木製品分野

三谷 龍二

(木工デザイナー)

自分の生活を見ていると、意外に身近に無垢の木がないことに気づく。森へ行く心が済んだ感じになる。木を使うことは、心の安定につながる。自然素材を暮らしへ取り込むことは意義深いことなのである。木を使った製品は長く使ってもらうことが大切。生活と木がうまく循環する、そのデザインが求められているのである。



コミュニケーション分野

戸村 亜紀

(クリエイティブディレクター)

コミュニケーション分野への応募は、木を主役にしたイベントやワークショップが多く見られ、一般の人にもっと参加して欲しいと感じられる魅力的なものもたくさんあった。参加を通じて、木の仕事をしたいなくても「こんな製品があったらいいなあ」など木に関わる人に意見や思いを届けるような場にこうした活動が育って欲しいと思う。



コミュニケーション分野

山崎 亮

(コミュニティデザイナー)

東北芸術工科大学 教授 「公園の父」と称された林学博士の本田静六氏は、「産湯のたらいから棺桶までこれなくしては生きていけない木材」と語っているが、その木材が最近別素材に置き換えられてきた。ウッドデザイン賞を審査していると、過去に戻るのではなく、新しい形で生活空間の中で木材を使う可能性への期待に包まれる。身近な空間での木材利用を改めて考えて欲しい。



技術・研究分野

青木 謙治

(東京大学大学院 講師)

技術・研究分野は今までにない木の使い方にチャレンジし、かつそのための技術の裏付け、科学的なエビデンスを示していくことが重要である。試作品も、それを開発するに至った経緯や将来、それをどう使うのかのビジョンが必要である。受賞作品を通じて、これまで想像もしていなかったような木材の使い方に気づいていただけたらと思う。



木製品分野

高橋 正実

(デザイナー、コンセプター)

第1回で素材の提案をされたものがプロダクトへ進化しているなど、ウッドデザイン賞の審査を通じて新たな進化が見られた。地域材を使って子どもたちに技術や工法を伝え、コミュニケーションが生まれる活動など、成果物としてのプロダクトを超え、木づかいを通じて私たちの未来を活性化させてくれる。関わる方々の思いや意識がプロダクトの背景にあることを嬉しく感じた。



木製品分野

末吉 里花

(一般社団法人エシカル協会代表理事)

ウッドデザイン賞の審査は初めてだったが、木を使った作品がこれほど広く展開できることに驚いた。人、社会、環境、地域に配慮したエシカルという考え方から見ると、製品の背景やストーリーがわかるものは魅力がある。売る人、買う人、作る人、自然、未来の五方よしの作品が多く見られ、皆さんが日常で身近に木を感じる事ができるきっかけになることを期待したい。



コミュニケーション分野

古田 秘馬

(プロジェクトデザイナー)

昨今、デザインという言葉が幅広い領域に使われるようになった。その背景には、ものをつくるというだけでなく、多くの人や地域がひとつのプロダクトやプロジェクトに関係している事実がある。コミュニケーション分野として評価すべきは、消費者と作り手だけでなく、森を守る人や街をつくる人など多くの人々が関われるプラットフォームであることである。こうした活動に着目し、身近な取組や地域を再認識して欲しい。



技術・研究分野

相茶 正彦

(木材バイオマス利用コンサルタント)

私はバイオマスの研究をしているが、木材利用の視点から見ても広がりがある分野だと思っている。構造や機能などの木の新しい使い方に加え、木の成分活用、そのアプリケーションとしての新たな用途開発に期待している。ウッドデザイン賞の受賞作品をヒントにして、これまで木を使うことが少なかった事業者にも使っていただき、それが消費者メリットにつながることを願っている。



技術・研究分野

恒次 祐子

(森林総合研究所 主任研究員)

審査する立場として、大きな技術革新でなくてもきらりと光るようなアイデアや今まで誰も目をつけていなかったような独創性を掘り出していきたいと考えている。木材は身近な素材であるゆえ普段は意識することが少ないかもしれないが、木の良さは科学的に研究される人の心と身体に良い影響を与えることがわかってきている。木を使った健やかで快適な暮らしを感じて欲しい。

